震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013 年 04 月 25 日

(C)河北新報社

むすび塾@インドネシア・ラユン村

生活再建 地域の力結束

住民参加ワークショップ

【バンダアチェ（インドネシア）高橋鉄男＝報道部】河北新報社は東日本大震災の教訓を防災・減災に生かす巡回ワークショップ「むすび塾」を24日、バンダアチェ市に近いラユン村で開いた。国際協力機構（JICA）との共催。2004年のスマトラ沖地震で被災した住民8人と東日本大震災の被災者3人が参加し、被災後の生活再建について話し合った。

（30面に関連記事）

ラユン村は同市から25キロ西に離れた漁村。津波で壊滅的な被害を受けて、被災後は海から1キロほど離れた山沿いに集団移転して暮らす。

村助役のブルハヌディンさん(48)は「住民投票で集団移転を決め、被災後2年でほとんどの人々が戻ってきた。移転先も集落ごとに区分した」と説明。被災前からのコミュニティーを大切に守る生活ぶりを紹介した。

非政府組織（NGO）

ラユン村　アチェ州のアチェブサール県にある漁村。インド洋に面した山あいの入り江にあり、04年のスマトラ沖地震で押し寄せた津波高は最大35メートルに達した。3集落の約700戸すべてが流失、住民950人のうち約200人が犠牲になった。

津波被害を受けた漁村を訪れ、地元住民と交流する「むすび塾」のメンバー＝24日午前10時ごろ、ラユン村（写真部・佐々木浩明撮影）

いのちと地域を守る

進行役は減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長が務め、震災の語り部として東松島市の貝田行政区長中山勝文さん(67)、大崎市の水難学会指導員安倍忠摩子さん(51)、多賀城市の東北学院大3年渡辺英莉さん(20)も参加した。

中山さんは「住民たちが力を合わせて生きようとしている姿が素晴らしかった。日本の復興もコミュニティーの力が欠かせない」と述べた。

一行は日本の支援で再建された中学校も訪れ、教育関係者と交流した。

復興は遅れている。

干物加工の作業場の再建もこれからで、生業の回復は遅れている。

漁船は、25隻にとどまる。被災前に200隻あった

の支援で同じ規格の住宅が提供されたことで「貧富の差が見えにくくなった」と現地の女性。ただ、震災から9年がたつが、